

## 修士論文概要

物乞いをする女性障害者の選択と自由：  
ダカール路上のライフストーリーにみる生計戦略

千葉 めぐみ

### 1. 研究の目的と方法

セネガル共和国において「障害者の物乞い」は障害者の貧困問題として、新聞、インターネットニュース等のメディアで取り上げられている。しかし、これまで物乞いをする障害者自身の物乞いに対する考えや態度について議論されることはほとんどなかった。また、物乞いをする障害者がどういう生活を送っている人たちなのかということは知られていない。しかし、物乞いをする障害者の生活実態や彼らにとっての、物乞いの意味・意義を明らかにすることは、障害者の貧困問題の解決の一助となる実質的に意味のある生計支援に必要である。

本論は、セネガル共和国の首都ダカール市で物乞いを生計とする女性障害者の暮らしの歴史(ライフストーリー)から生計・生計戦略の多様性、包括性を描き出すことで、障害者の生計としての物乞いの意味・意義を明らかにし、その選択の過程を描き出すことを目的とした。女性、障害という複合的な困難にある女性障害者が、女性、妻あるいは母という行為主体として選ぶ生計戦略の過程の包括性、多様性を描き出すことで、セネガルの障害者の生活および貧困を理解し、障害者の実質的な生計支援の取り組みに対する示唆を得ることを試みた。

個別インタビューを行い、生計としての物乞いという経験に対する多様な主体の語りから、セネガルの女性障害者の生活を理解することを試みる質的な研究である。統計資料やデータでは読み取れない、障害者の生活の質や貧困を生む社会の構造を明らかにするため、ライフストーリー分析を用いた。

なお、本論は文献調査、統計・政策文書等の資料調査ならびに聞き取り調査からなる。第一に、「障害と開発」、「貧困」、「ジェンダー」および「生計・生計戦略」にかかる文献、報告書などを調査し、「障害と貧困」を単なる所得による貧困ではなく、より包括的な視点から捉え、セネガルの「障害と貧困」を包括的に捉えるための「障害と貧困」の概念や分析の視点を整理した。

また、「障害の社会モデル」およびアマルティア・センの「ケイパビリティ・アプローチ」を援用し、女性障害者の生計・生計戦略を分析した。具体的には、個人の特性、社会・環境という生計選択を構成する多様な要素を包括的な視点をもって分析することで、女性障害者が有形・無形の資源をいかに活用し、生計を選択しているか、また、資源へのアクセスや活用を制限する要因を明らかにした。

加えて、分析にはマクロの視点とミクロの視点を両方用いた。マクロの視点は、「障害と開発」の先行研究やセネガルの法令、政策や障害者関連の統計資料などを検討し、政策、制度の不備あるいは伝統的な機能障害に対する態度やジェンダーの問題によって生み出される社会の障害、つまり、参加や機会を阻害する社会の要因を分析した。一方で、ミクロの視点では、女性障害者の

ライフストーリーから物乞いという生計選択が「誰が」、「どのようにして」、「なぜ」なされるかを分析した。マクロの視点で分析した社会・環境が実際に障害者個人の選択にいかなる影響を与えるのかを踏まえ、女性障害者の選択の過程を分析し、実質的な機会や参加という視点から、セネガルの女性障害者の生活や貧困を理解することを試みた。

## 2. 論文の構成

### 第1章 はじめに

- 1-1. 研究の背景と問題の所在
- 1-2. 研究の目的
- 1-3. 研究の方法
- 1-4. 諸概念の定義
- 1-5. 論文の構成

### 第2章 本論の分析枠組み

- 2-1. 分析の理論的枠組み
- 2-2. 本論の分析枠組み

### 第3章 「障害と貧困」をめぐる状況と課題

- 3-1. 「障害と開発」の先行研究の検討
- 3-2. 障害者の物乞いを巡る議論
- 3-3. 女性障害者の貧困をめぐる議論
- 3-4. 小括

### 第4章 セネガル共和国における障害者を取り巻く環境

- 4-1. セネガルの開発政策と社会保障
- 4-2. セネガルの障害者福祉行政の概要と実際
- 4-3. 障害者の生活実態
- 4-4. セネガルの女性障害者を取り巻く状況
- 4-5. 小括

### 第5章 ダカールの女性障害者の生計戦略選択の分析

- 5-1. 女性障害者の生計戦略の分析
- 5-2. 物乞い経験がある女性障害者のライフストーリーの分析
- 5-3. 物乞い経験がある女性障害者の生計戦略をめぐるケイパビリティへの考察
- 5-4. 小括

### 第6章 結論と課題

- 6-1. 結論
- 6-2. 今後の課題

### 3. 論文の概要

本論は、セネガルの首都、ダカールで物乞いを生計とする女性障害者の暮らしの歴史（ライフストーリー）から生計・生計戦略の多様性、包括性を描き出すことで生計としての物乞いの意味・意義を明らかにし、その選択の過程をいくつかの事例から描き出した。

まず第2章で「本論の分析枠組み」と題し、第3章以降の分析枠組みを提示した。第3章では、「障害と貧困」を巡る状況と課題を、「障害と開発」、「障害者の物乞い」、「女性障害者の貧困をめぐる議論」に関する先行研究から検討した。「障害と開発」の先行研究検討の結果、障害（者）にまつわる課題が開発から排除されてきたことによって、教育や医療などの、社会サービスへのアクセスや機会が制限され、それに伴い雇用の問題が発生し、所得貧困に陥りやすいこと、また、就業、就学機会の制限は障害者にソーシャルネットワーク構築の機会の制限をもたらすことが明らかになった。

次に、障害者の貧困問題と密接な関わりがあると考えられる「障害者の物乞い」について、イスラム教によって裏付けられた妥当性に基づく、経済的な効率性、障害者本人に内在化された障害者に対する偏見やスティグマ、経済的な自立に対する価値観など、その選択には多様な理由が存在していることがわかった。また、障害者の物乞いという見た目には同じ人たちは、学歴、就業歴、上京の理由など、多様な背景を持つ人であることがわかった。他方で、経済的な貧困、限定されたソーシャルネットワーク、物乞いを望んでいないという点で、共通性があるということがわかった。

また、女性障害者は障害に加え、女性という性別により不利益を受けやすく、男性障害者よりもより周縁化された存在であり、女性障害者の問題はいくつもの要素が複雑に絡み合った、相互作用の結果、形成されていることが明らかになった。

続く、第4、5章では、事例研究としてセネガルを取り上げ、マクロとミクロの視点から、女性障害者を取り巻く環境とその生活実態を分析した。第4章は障害者を取り巻く環境を障害者関連福祉政策、統計資料、政府関係者への聞き取りで明らかにした。結果、障害と障害者の課題が開発から長く周縁化されていた影響で、セネガルの障害者関連福祉は、未発達であり、制度の恩恵は障害者に行き渡っていないということが判明した。また、法律では全ての障害者の機会と参加が保障されているが、実際には、障害者は教育、医療などの社会サービスへのアクセスが制限されていることや、インフォーマルセクターで働く人が多いことから、ソーシャルセーフティネットワークがなく、ショックの際に脆弱である様子が一部読み取れた。また、男性と女性の間で就学、識字習得、雇用の機会の不均等があることも読み取れた。

そして、セネガルのジェンダーに関する議論から、伝統的な価値観が女性障害者を障害だけでなくジェンダーによって、さらに周縁化していることが伺えた。セネガルに根強く残る家父長制の影響で、世帯では男性の支配が強く、性別役割分業により女性は男性よりも、より多くの労働を担っていることがわかった。また、家父長性は世帯だけでなく、社会における男性の優位性を強め、男女間の機会の不平等をもたらしていることがわかった。セネガルの女性障害者は障害だ

けでなく、ジェンダーによって抑圧され、さらに周縁化されているという実態が解明された。

さらに、第5章では、制度の不備やジェンダーの問題が実際に女性障害者の生活にいかなる影響を与えているのか、そして、女性障害者がどのような生活を送っているのかという点を理解するために、物乞い経験がある女性障害者の生計戦略を分析した。女性らのライフストーリーから、誰が、どのように、なぜ、生計として物乞いを選択するか、物乞い以外の生計を選択するのかという選択の過程を分析したことで、生計選択における自由の幅、すなわち、生計戦略をめぐるケイパビリティについて考察し、女性たちの生活と困難を理解することを試みた。

分析の結果から、次のことが明らかになった。第一に、「物乞い」は女性障害者たちが望む生計ではないということである。人口の95パーセントがイスラム教徒であり、持つものが持たないものに与える「喜捨」の行為は宗教上の裏付けがあることから、それを生計とする妥当性はある。しかし、物乞いは女性障害者にとって、機会や資源へのアクセスを制限され、生計の選択肢が極限の状態となり、選んだ生計である。つまり、彼女らが数ある選択可能な選択肢から選んだ生計ではない。所得貧困や社会が人に対して生産性を求めるという抑圧から、他の選択を検討する機会を与えられないまま、「持たないもの」であることを受け入れざるを得ない状況のものと選択なのである。

物乞いの行為は経済活動としては、その宗教的位置付けから、その効率性、確実性が高い。現在、物乞い以外の生計で生活している人たちは、かつて物乞いをしていた頃の方がより高い収入を得ていたと発言した。しかし、障害者にとっての物乞いは、機能障害という差異のために、自分たち障害者は非障害者より「持たないもの」だという偏見を受け入れる、人間の尊厳に反する行為なのである。世帯の経済状況や子どもの将来のための選択であったとしても、「他の選択肢」がなく、人間の尊厳に反する選択をしなければいけない状況は、偏見やスティグマによって、参加の機会が制限されている障害者をさらに社会から周縁化し、更なる貧困の拡大へと導く。

次に、生計選択の過程を分析することを通じ、女性障害者の生活や彼女らが直面する課題の多様性と、生計選択に対する世帯の社会経済状況の強い影響が確認された。ここから言えるのは、女性障害者の直面する課題は多様であり、複雑だということである。障害、貧困、ジェンダーというそれぞれ別の課題ではなく、それらの問題が複雑に絡み合った結果、形成される問題であり、問題の一側面の解決だけでは、彼女らが直面する問題は解決されない。

よって、女性障害者の実質的な生計支援には、彼女らが女性であり、障害者であるという個人の特性を踏まえたうえで、彼女らの世帯の社会・経済状況、ソーシャルネットワークの有無など、生活の細部と、それらが複雑に絡み合った状況を捉え、絡み合った紐をひとつひとつ解くように問題を解決していくことが必要とされる。就学、職業訓練といった画一的な支援ではなく、人々の多様性を踏まえたうえで、それぞれの生活の細部を捉え、包括的な支援をしていくことの必要性が示唆された。言い換えれば、貧困という課題に取り組むあたり、人々の生活を構成するある一面だけに対するアプローチでは課題は解決されず、生活の包括性を捉えた支援を検討する必要性が示唆された。